



4月28日より開園します。
ぜひお越し下さい。

ASAHIYAMA Zoo

発行所
動物資料展示館
旭川市
旭山動物園
☎ 36-1104

絶滅危惧種って何だろう？

地球上から絶滅、つまり全くなされたことをいいます。ある動物が絶滅してしまうと、その動物に食べられていた生き物が増えすぎてしまったり、その動物を食べていた動物たちはエサがなくなって困ったりします。「絶滅」とは決してその動物だけの問題ではありません。私たちが想像しきれないほど深刻なことなのです。

絶滅・野生絶滅 (EX・EW)

- 「絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)」
絶滅の危機に瀕している種
 - 「絶滅危惧ⅠA類 (CR)」
ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種
 - 「絶滅危惧ⅠB類 (EN)」
ⅠA類ほどではないが、近い将来に絶滅の危険性が高い種
- 「絶滅危惧Ⅱ類 (VU)」
絶滅の危険が増大している種

旭山動物園にいる動物では、ユキヒョウやオランウータンは EN に、ホッキョクグマ・オオワシ・タンチョウ・チンパンジーなどが VU に分類されています。

ホッキョクグマは最近まで、今よりも危険度の低い LR という分類でしたが、温暖化の影響で絶滅の危険がたかまっており、VUに変更されました。

IUCN (国際自然保護連合) の基準により環境省のレッドデータの分類をもとに表しています。

CR とは Critically Endangered
EN とは Endangered
VU とは Vulnerable
LR とは Lower Risk の略です

越冬しに南下してきます



旭山動物園で初！オオワシの人工ふ化

オオワシ絶滅危惧Ⅱ類 (VU) のヒナ すくすく

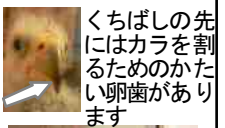
旭山動物園でオオワシがふ化しました。オオワシはロシア極東部(左上の地図のとおり)に500羽程度確認されており、毎冬北海道にも渡ってくる馴染みのある動物です。旭山動物園では、2005年にオオワシの自然繁殖に成功しており、昨年から人工繁殖を試みていました。将来、野生の個体数が急激に減少するようないふ化した場合、オオワシのような一度の産卵数が少ない動物に与えるダメージはとて莫大なものになります。そんな時のために、動物園では繁殖技術をも身につけておくことが重要だと考えています。

卵を産みだす習性を利用して！

今回、人工ふ化2年目の挑戦で成功することができました。オオワシは通常一年に1〜2個の卵を産み、育てますが、人工繁殖をすることで一年に育つヒナの数を増やすことを大きな目標にしました。オオワシが産卵したら、巣からすぐに卵を取り出すと、母鳥はさらに1つ、2つと卵(補充卵)を産み足します。この習性を利用して、3卵を採卵し、4卵目を親鳥にまかせることにしました。



1日目
固いカラをやぶってでてきたときは体重およそ100g



4日目
数日でモノを目で追うようになります



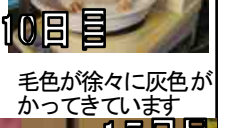
エサは馬肉や林檎・バナナ。成長にあわせて量をふやします



7日目
巣から取り出し、母鳥の代わりに卵を温めたり、適した環境をつくる機械)に入れます。



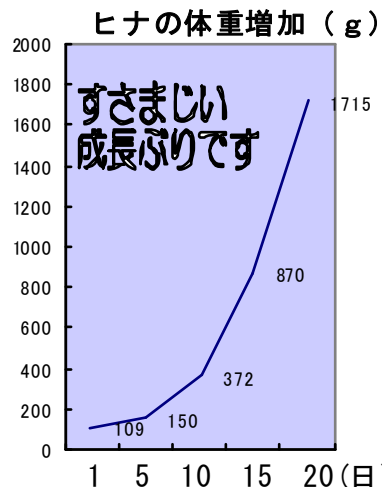
10日目
毛色が徐々に灰色がかったきています



15日目
ふ化後2週間で体重はおよそ10倍に

オオワシの本来の姿は

今回、オオワシのような将来が心配されている動物で、人工ふ化に成功したことは動物園としてとてもうれしいことです。鳥がもつ習性を利用してことで、通常年に1〜2羽のところを母鳥がふ化させたヒナを含め3羽のヒナが育っています。将来、オオワシに何かがあったときに、この技術が役立つでしょう。でもその前に、野生のオオワシが生きていける環境を保っていくことが何より大切なことだと思いませんか。毎冬、北海道にはオオワシが飛来してきます。オオワシが越冬できる豊かな自然を守っていききたいものですね。



旭山今昔

(その3)

昭和49年、旭山動物園に初めてゴリラがやってきました。のちにオスのゴンタも仲間入りし、念願の繁殖には至りませんでした。

ゴリラのマリは、およそ2才の幼いころ旭山にやってきました。そんなマリの母親代わりは担当の飼育係員Mさんでした。「コッココッコ」となっているMさんのそばにいました。夕方、Mさんが仕事を終えて帰ろうとすると、マリは独りになるのを寂しがり、Mさんを必死に引き止めたといいます。そんな時は、マリが満足するまで遊んでやっていたそうです。また、育ち盛りのマリの絶好の遊び相手もMさん。日中は園内や裏山など散歩にいたり、ときに寝技が得意な獣医と取っ組み合いになって遊んだりしていました。

そんなある日のこと。ゴリラは若い頃に木登りをするといいいますが、若いマリも同じく散歩中に園内のアカマツの木に登っていききました。木の幹をつたい、上手に上の方まで登り切った時、突然マリのけたたしい悲鳴が聞こえてきたのです。マリは楽しさのあまり夢中になって登っていったのでしよう、下を見ることもなく。突然ふと自分が高い所まで登ってしまったことに気づき、足がすくんだのかもしれません。マリの形相から尋常ではないことは明らかでした。

高い所が苦手なMさんでしたが、迷うこともなく木に登り、体重約50kgもあるマリを担いで助け出しました。そんな幼いマリとの思い出が詰まった木が今も園内に残っています。動物資料展示館前にある一本のアカマツの木です。旭山動物園が40周年を迎える今年も、また1つ年輪を刻みます。

